



深川市

ふるさと歴史めぐり

国指定史跡：音江の環状列石

—ごあいさつ—

「文化財」という言葉を聞いて、皆さんはどのようなものを思い浮かべますか？立派なお城でしょうか？それとも金色に輝く仏像でしょうか？もちろん、代表的なものとしてそのようなものもありますが、昔の人々の暮らしにかかわった建物、昔から受け継がれている踊り、国土の成り立ちを知ることができる地層やそこに含まれた人間の生活の跡なども貴重な文化財です。

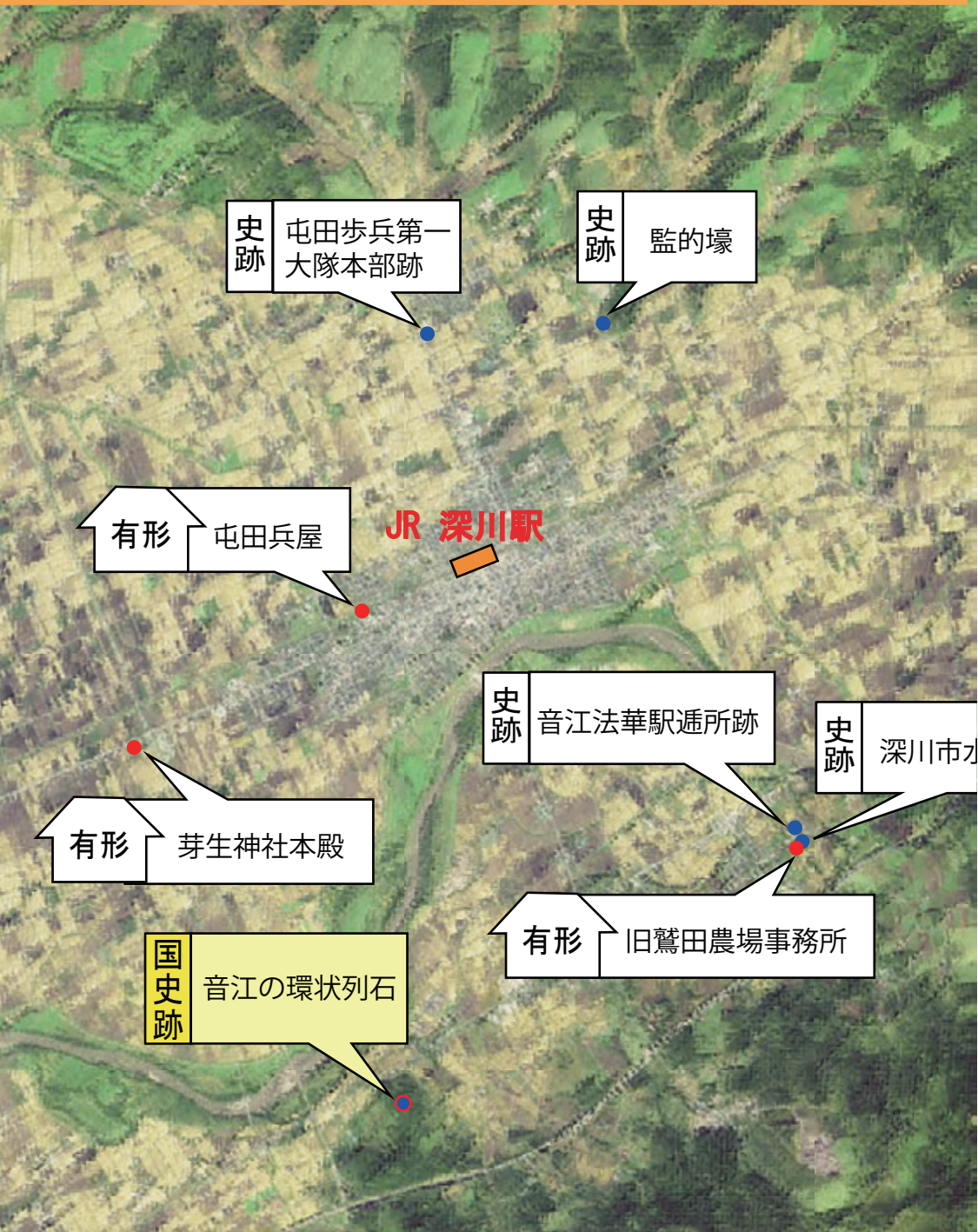
深川市の開拓は、明治22年、上川道路（現国道12号札幌－旭川間）が開通し、華族組合雨竜農場が設立されたことで始まりました。その後、大正7年に深川村が町制施行、昭和38年に隣接4町村が合併し深川市となりました。そして、昭和45年多度志町を合併し現在に至っています。

文化財は、先人たちが守り、受け継いできた地域の宝です。深川市には、雄大な自然、先住民族の遺跡や遺物、さらには開拓の労苦を語る多くの貴重な文化財があります。今を生きる私たちは、先人たちと同じように、それらをしっかりと将来に引き継いでいく責任があります。このハンドブックを開き、深川市内の文化財を皆さんが知ることで、地域に誇りを持ち、文化財を大切にしてくれることを期待します。

【目次】

- 深川市の文化財マップ 1～2
- 国指定史跡 音江の環状列石 3～14
- 深川市指定有形文化財
 - ・芽生神社本殿 15
 - ・屯田兵屋 16
 - ・旧鷺田農場事務所 17～18
- 深川市指定無形文化財
 - ・猩々獅子五段くずし 19
 - ・多度志獅子舞 20
 - ・納内町猩々獅子舞 21
 - ＊深川市の和太鼓団体
 - ・多度志太鼓 22
 - ・音江イルム太鼓 22
- 深川市指定史跡
 - ・音江法華駅通所跡 23
 - ・屯田歩兵第一大隊本部跡 24
 - ・監的壕 25
 - ・先住民族の竪穴住居跡 26
 - ・深川市水稻発祥の地 27
- その他の文化財関連施設
 - ・郷土資料館 29
 - フカガワクジラ 30
 - ・詩歌の散歩道 31
- 参考資料 33～38

深川市の文化財マップ



史跡

屯田歩兵第一大隊本部跡

史跡

監的壕

有形

屯田兵屋

JR 深川駅

有形

芽生神社本殿

国史跡

音江の環状列石

史跡


音江法華駅遁所跡

史跡

深川市水戸藩陣跡

有形

旧鷺田農場事務所



水稲発祥の地

史跡

先住民族の竪穴住居跡

深川市内には、国指定史跡が1か所、市指定有形文化財が3か所、市指定無形文化財が3団体、市指定史跡が5か所あります。また、深川市に関する資料が郷土資料館、旧鷺田農場事務所に展示・保管されています。

国指定史跡

おとえ かんじょうれっせき 音江の環状列石

昭和 31 年 12 月 28 日指定

音江町字向陽 171 番地 1

1. 音江の環状列石調査のあらまし

音江の環状列石は、JR 深川駅の南方約 5km の石狩川に向って張り出した、稲見山と呼ばれる丘陵（標高 113～117m）の突端部にあります。遺跡の発見は古く、明治時代の中頃には、その存在が知られ、大正期には^{こうのつねきち}河野常吉や^{あべまさき}阿部正己による調査がありました。



▲ 音江の環状列石

本格的な発掘調査は、東京大学文学部考古学研究室の^{こまいかずちか}駒井和愛教授らにより、昭和 27（1952）年 10 月、同 28（1953）年 10 月、同 30（1955）年 5 月、同 31（1956）年 5 月と 4 回にわたる発掘調査をへて、昭和 31（1956）年 12 月 28 日に国指定史跡になりました。

これら一連の事業を^{けんしやう}顕彰するために、「音江の環状列石の碑」が、昭和 32（1957）年 11 月 3 日に完成し、国道 12 号線の入口に建てられています（図 1）。

また、深川市音江の環状列石だけでなく^{おたるしおしよる みかさやま じちんやま よいちちやう}小樽市忍路三笠山、地鎮山、余市町^{にしぎやま}西崎山、ニセコ町^{ほくえい}北栄、滝台^{たきだい}などの環状列石の発掘調査の成果を収めた『音江—北海道環状列石の研究—』と題する報告書が、昭和 34（1959）年 6 月に慶友社から^{けいゆうしゃ}刊行されました。



▲ 図 1 音江の環状列石の碑
（1957 年 11 月 3 日完成）

2. 音江の環状列石の発見

音江の環状列石が初めて報告されたのは、明治 27 (1864) 年刊行の『東京人類学会雑誌』(第 10 巻第 103 号) という考古学・人類学関係学会誌の「石狩川沿岸穴居人種遺跡」という記事です(図 2)。



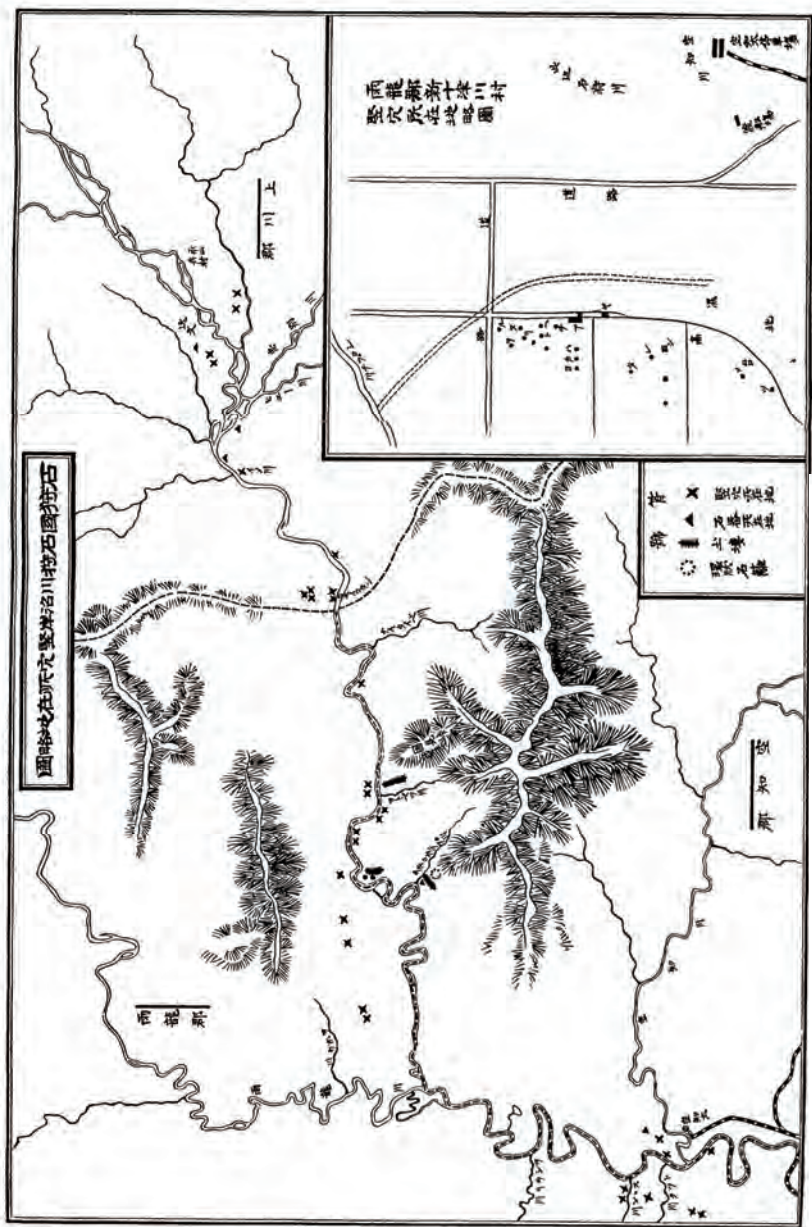
▲図 2 音江環状列石が初めて紹介された『東京人類学会雑誌』第 10 巻第 103 号と執筆者の高畑宜一

執筆者は高畑宜一で、当時、札幌にあった北鳴学校の教員でした。彼の父は、開拓判官・岩村通俊の腹心で上川探検に貢献した高畑利宜です。利宜が退官後に開設した空知太(滝川)、音江法華(音江)の駅遞を根拠地として明治 26 (1863) 年の夏休みに石狩川中流域の遺跡分布調査を行った結果を報告したものです。

調査は、石狩川に空知川が合流するあたりから、滝川、新十津川、深川、神居古潭、近文、永山周辺までを対象とし、堅穴所在地(×)、石器所在地(▲)、土塙(土でできた小さな丘)、環状石籬に分けて図示、説明し

ました。ここでいう「環状石籬」とは石を間垣状に並べたものをいい、後にストーン・サークル、環状列石などと呼ばれているものです。こうしてできたのが、「石狩国石狩川沿岸堅穴所在地略図」(図 3)です。

そして、本文には環状石籬という項目を設け、図中央右のオキリカップ川以西の丘陵上に「環状石籬」として記載され、11 個あること、内部に大きな石が埋っており、発掘が大変なこと、石籬を倒そうにも深く埋もれて動かすことができないことなどが書かれています。



▲ 図 3 石狩川沿岸穴石所在地略図

(高畑直一 『東京人類学雑誌』 第 10 号 第 103 号 1894 年より)

そして石籬の立地する所は、眺望のきく山の上で、眼下に石狩川を眺望する要地で、この地の咽喉とも称すべき所で、あるいは祝祭のために使用したかもしれないと述べています。

次の土壌の最初の解説は、駒井和愛による『音江—北海道環状列石の研究—』(1959)のなかで、「南側の遺跡」と呼称された遺跡に相当するところでは、高みを削って平坦地を造成し、余った土を南側と北側、東側に集積して堤を作り、中に墓壇を造成した遺跡で、後に周堤墓と呼称された遺跡に相当するものではないかとも考えます。

3. 河野常吉による調査

北海道史の生き字引といわれた河野常吉による開道 50 周年記念事業の「北海道史」編纂事業のひとつとして、本遺跡の測量や撮影等の調査が大正 6 (1917) 年 5 月に行われました。その成果は『北海道史附録地図』(1918)に「音江村の環状石籬」として、付近の地勢や実測図に現況、写真を添えて報告しています。この時点では 15 基のストーンサークルがあったことがわかります (図 4)。

阿部正己は、1915 (大正 4) 年、河野常吉を助けて『北海道史』の編集員となり、業務の一環として、音江の環状列石の発掘を 1917 年に行い「石狩国の環状石籬」として、『人類学雑誌』第 33 卷第 1 号(1918)に報告しております。「発掘した遺構は、4、5 個で何等の材料も発見されず、墳墓でないことは明白なり…」と述べています。

また河野常吉は、1924 (大正 13) 年に刊行された『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』においても「音江村の環状石籬」として、種別、名称、所在地、地目、地積など 12 項目にわたって、詳細に解説しております。

4. 東大（駒井和愛教授）による環状列石調査

（1）調査の経過

第二次大戦の敗戦によって、それまで中国大陸を主な研究活動の場としてきた東京大学の考古学研究室は、昭和 20（1945）年 8 月の敗戦後、新たな活動の地を北海道に求めます。

戦後の東大考古学研究室を主宰した駒井和愛（図 5）は、昭和 22・23（1947・48）年に網走市モヨロ貝塚の発掘を行い、昭和 24（1949）年の小樽市忍路、地鎮山、昭和 25（1950）年の余市町西崎山、昭和 26（1951）年の余市町西崎山、ニセコ町北栄・滝台の調査を経て、昭和 27（1952）年 10 月から音江の環状列石の調査に着手しました。

本遺跡の調査は昭和 28（1953）年 10 月、昭和 30（1955）年 5 月と続き、昭和 31（1956）年 5 月の段階で調査を終了します。昭和 31（1956）年 12 月 28 日には、国指定史跡に指定となり、未ながく保存されることになりました。

そして、昭和 32（1957）年 11 月 3 日には、音江の環状列石の碑も完成し、これからの遺跡の愛護と活用を暖かく見守っています。

▼図 5 駒井和愛(東大)



駒井和愛（こまい かずちか）

1905(明治 38)年生まれ。

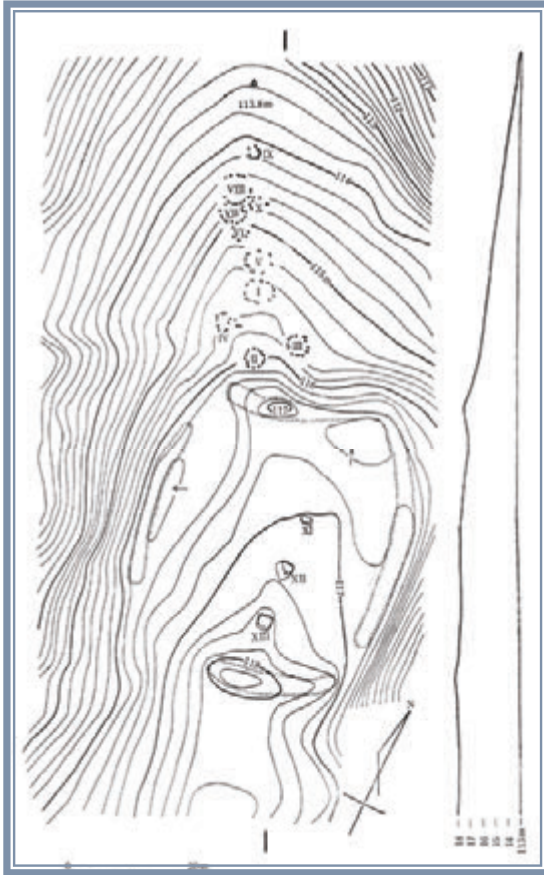
早大文学部卒。

東大・原田淑人教授のもと東洋考古学を専攻。
戦後、網走・モヨロ貝塚、小樽・忍路・地鎮山
及び余市・西崎山、ニセコ・北栄の列石を発掘。

『音江－北海道環状列石の研究－』

1959(昭 34)年 慶友社

(2) 北側の遺跡



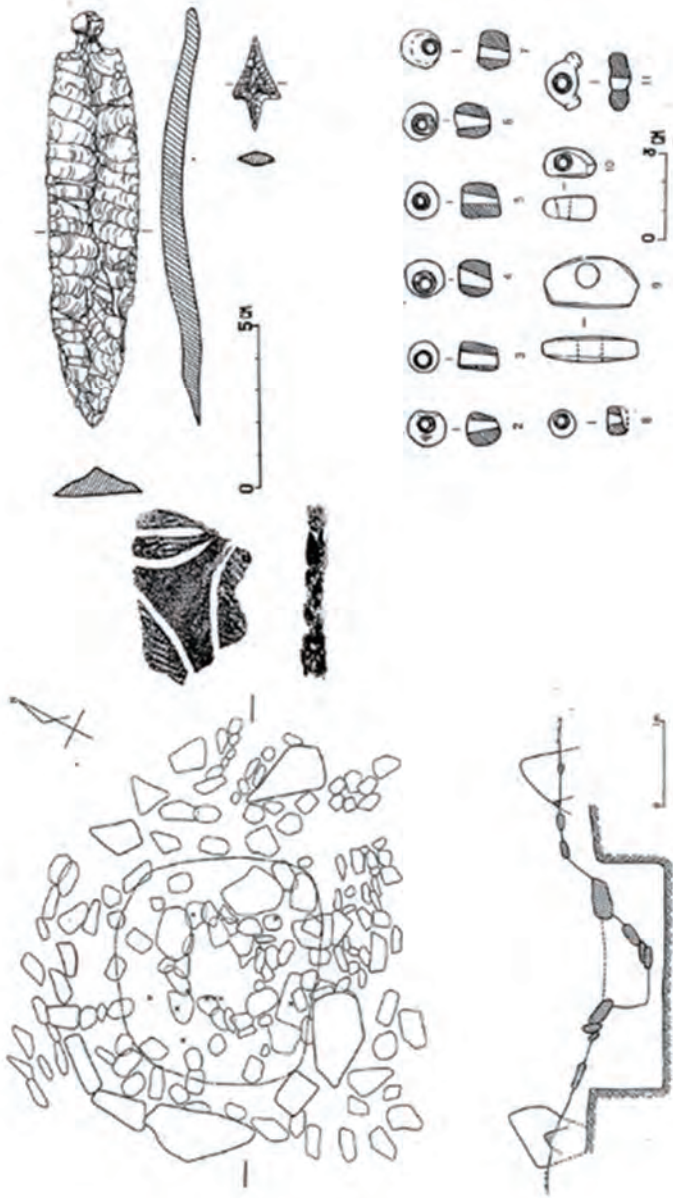
東大の調査では、音江の環状列石群を大きく、北側の遺跡と南側の遺跡の二つに分けて調査しました。10基の環状列石が確認されておりましたが、本調査では、2、3、5、6、7、9、10号と名付けられた列石の調査を行ったものの、すでに破壊されていたり、石がはずされたりしたものも多く、清掃だけして終わったものもあるようです(図6)。

◀ 図6 音江の環状列石全体図
(駒井和愛『音江—北海道環状列石の研究—』1959年より)

・音江第5号墓と出土遺物(図7)

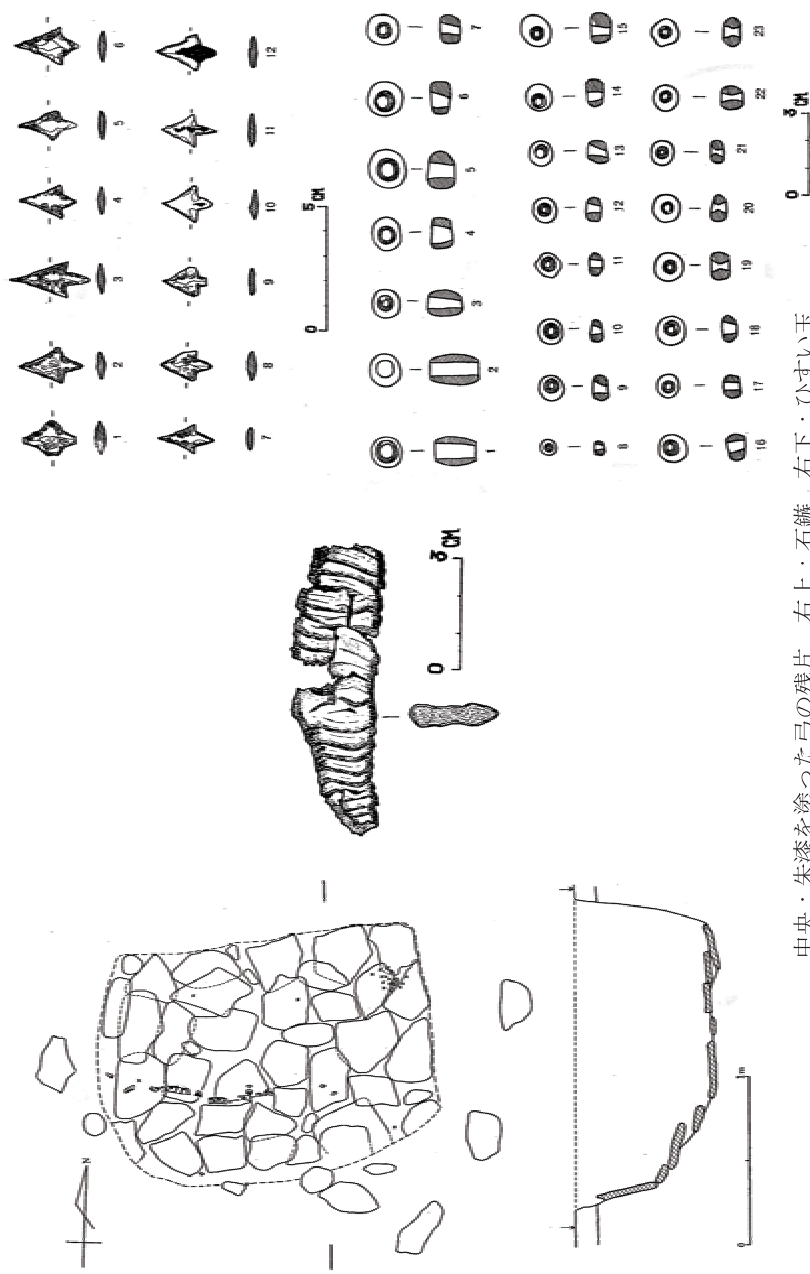
北側遺跡の中央にある第5号墓は直径4mの輪をなし、10個ほどの石が立っていました。積石つみいしの下に深さ1m、径2.5mの隅丸方形の墓壇があり、ひすいの飾玉10点(右下)、それにチャート製石小刀1点(右上)、三又状すりけしもんみつまたじょうの土器片(中央)、石鏃せきざくなどが出土しました。

▼ 図 7 音江第 5 号墓と出土遺物（北側の遺跡）



中央：磨消文の土器片 右上：チャート製石小刀 右下：ひすい玉
 （駒井 和愛 『音江—北海道環状列石の研究—』 1959 年より）

▼ 図8 音江第11号墓と出土遺物（南側の遺跡）



中央：朱漆を塗った弓の残片 右上：石鏃 右下：ひすい玉
 (駒井 和愛 『音江—北海道環状列石の研究—』1959年より)

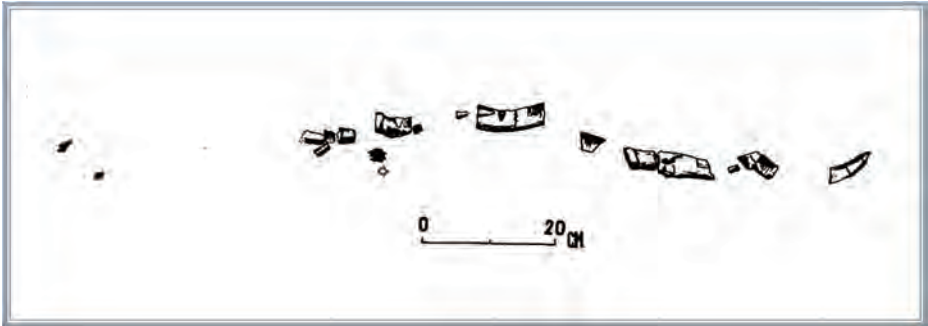
(3) 南側の遺跡

北側の遺跡のさらに南方に東西に走る 2 本の土手が認められました。北の方は 30m、南の方がそれより少し短いようです。南方の土手の長さは、およそ 40m ほどです。東西にも 40m ほどの間隔で土手が走るようです。11 号墓、12 号墓、13 号墓とほぼ 10m ほどの間隔で南北に並んでいました (図 6)。

・音江第 11 号墓と出土遺物 (図 8)

東西がおよそ 2m、南北およそ 1.5m、深さが 1m 弱の^{どこう}土壇が確認され、底に自然石が敷かれていました。その下は地山となっています。土壇の北東隅からひすい玉 17 点がかたまつて出土しました。

中央あたりから^{こくようせきせいせきぞく}黒曜石製石鏃 2 点が西を向いて並んで出土し、その西方に同様な石鏃 11 点が東向きに並んで出土しました。ひすいの玉は 23 点 (右下) が出土しました。特に珍しいものとしては、朱漆を塗った弓の部分 (中央) が出ました。おそらく弓と矢の束が一緒に置いてあったものであろうと推察しています (図 9)。



▲図 9 朱漆を塗った弓と石鏃の出土状況
(駒井和愛『音江—北海道環状列石の研究—』1959 年より)

(4) 音江の環状列石発掘の成果

音江の環状列石発掘の成果を簡単にまとめますとおよそ次のようになります。

○音江の環状列石発掘の成果（要約）

1. 丘陵上の石狩川を望むところに立地
2. 立石、積石、墓穴から構成
3. ひすい玉や朱塗り弓、石鏃^{せきぞく}、土器などが出土
4. 時期的には縄文後期（現在の区分では後期・晩期に相当）
5. 石器時代のアイヌの墳墓^{ふんぼ}であろう

○その後の経過

昭和 31（1956）年 12 月 28 日 国指定史跡となる

昭和 32（1957）年 11 月 3 日 音江の環状列石の碑完成

昭和 34（1959）年 6 月 15 日 『音江—北海道環状列石の研究』刊行



◀ 図 10
発掘調査の様子。右が駒井氏。
（斉藤忠『〈写真集〉遺跡—今と昔—』
1997 年より）

図 11
大正 6 年の環状列石の様子。
（北海道大学附属図書館編
『明治大正期の北海道 1868・1926
〈写真編〉』1992 年より） ▶



5. 音江の環状列石…国指定をうけてから 60 年

○駒井和愛教授の思い (『音江』1959 年解説より)

昭和 27 (1952) 年から昭和 31 (1956) 年までの間、4 年間にわたる調査に協力した藤谷軍一村長、池田輝海教育長 (図 12)、川上礼吉、鈴木仁平、市場義人ら地元各氏の絶大な協力を謝意を表し、今後の活用を期待している。



▲図 12 音江村教育長
池田輝海氏
(1920～2011)

(『音江』1959 年の最終頁)

「終りに私は、近頃我国でもストーン・サークルに関心がもたれるようになって、日本考古学の領域の豊かになったのを喜ぶとともに、我が音江の向陽や忍路の三笠山、地鎮山 (以下略) などのストーン・サークル (環状列石) が、かのイギリスのストーン・ヘンジ、其の他のストーン・サークルの手入れの届いた芝生のなかに、国家の文化財として保護されているかの如く、管理者からも、見学者からも温かい心で取り扱われることを望んでやまない次第である。」

駒井和愛教授が読んだ句

^{おしよろ おか}
「忍路丘 ストーン・サークルゆ降りくれば りんご畑に月のかかれる」
「りんごのできるところにストーンサークルあり」

(駒井和愛『日本の巨石文化』学生社 1973 年より)

深川市指定有形文化財

めむじんじゃほんでん 芽生神社本殿

昭和46年5月20日指定
メム6号線本通



▲芽生神社本殿の写真



▲竜の彫刻

メム地方に多かったヤチダモを素材に、明治33年10月2日に奈良県吉野郡十津川郷からの移住者である浦典相氏が中心となって建立しました。1.4mもある竜の彫刻をはじめ、壁や破風などにも彫刻がほどこされ、芸術的にも価値の高い建築物です。現在は、本殿を覆うように屋根、壁でさやがけされており、風雨霜雪にさらされ朽ちるのを防いでいます。

ここには、熊野坐家都御子大神、大國主大神、金刀比羅大神が祀られており、五穀豊穰、商売繁盛、えんむすび、良縁むすび、開運厄除けのご利益があるとされています。境内には、菊亭候開拓碑、忠魂碑、やまとつがわひやつこだんたいかいたくきねん、大和十津川百戸団体開拓記念碑、地神宮があります。



▲芽生神社拝殿

※本殿の見学希望の際は、事前
に申し込みが必要となります。

連絡先》〒074-0015

北海道深川市深川町字メム6号線本通67

電話番号：09013036822

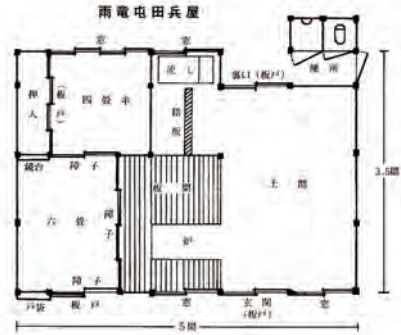
<http://memujinja.jp/index.html>

とんでんへいおく
屯田兵屋

昭和 52 年 6 月 21 日 指定
西町 3 番 15 号
(生きがい文化センター敷地内)



▲屯田兵屋の外観



▲兵屋の平面図

明治 28 年と 29 年に北境の警備と北海道開拓の使命を帯び、^{いらやん おさむない}一巳と納内
に入植した^{うりゅうとんでんへい}雨竜屯田兵の住居を復元し移築した建物です。^{はり}梁の一部に当時の
ものを使用し、まさぶき屋根にするなどほぼ完全に復元しており、開拓当時
の姿を^{しの}偲ぶことができます。兵屋の建坪は、間口 5 間、奥行き 3 間半の 17
坪 5 合で最初の屯田兵村である^{ことば}琴似のものが標準となっていました。構造も
ほとんど同じで、入り口から間口 2 間 (1.5 間) の土間を裏まで通し、隅に
便所があり、それに 6 畳の板間と^{ふみいた}踏板でのぼる台所が接属し、その奥に 6 畳
(8 畳) と 1 間半の押入れつきの 4 畳半がありました。板間に炉が切ってあ
り、薪を燃やして暖を取り炊事もすることになっていたもので、屋根に煙出し
をつけ、台所と共に天井は張って
いません。外部の戸は木戸、窓は障
子または武者窓であり、冬の寒さ
をしのぐのに苦勞したようです。
現在、兵屋の中にはピーポー銃、軍
服など屯田兵に関する資料を展示
しています。



▲展示の様子

きゅうわしだのうじょうじ むしよ
旧鷺田農場事務所

昭和 52 年 6 月 21 日指定
 音江町 2 丁目 11 番 38 号



▲旧鷺田農場事務所外観



▲昔の事務所の様子

旧鷺田農場事務所は、鷺田軍蔵わしだぐんぞうが農場事務所として明治 43 年から 3 年の歳月をかけて建てたものです。軍蔵は福井県丹生郡糸生村にゅうぐんいとうの出身で自作農家の次男として育ちました。24 歳のとき故郷をでて函館に上陸し、小樽で様々な職業を経てから石狩川汽船会社につとめました。その後、資金と馬を手にいれ、音江法華駅おとえぼつけきえてい通建設後にはそこを中心に運搬業うんぱんぎょうや回漕業かいそうぎょうを営みました。そして、資金をためてから音江を開墾する土地として選び、貸付をうけ水田耕作を目指しました。

その頃に軍蔵が住宅として建てたのがこの旧鷺田農場事務所のはじまりで、軍蔵の家族と小作人、使用人がともにくらしていたようです。その後、昭和時代になってからは音江村おとえむらが購入し、町役場や公民館として使用していました。現在までの間に何度か増改築が施されているため、当時のまま残っているのは階段及び 2 階和室などごく一部になっています。しかし、カツラやエンジュの長材柱しのなどから当時の豪壮さを偲ぶことが出来ます。



▲玄関前の様子

旧鷺田農場事務所の所蔵品

現在、旧鷺田農場事務所には、農具を中心とした昔の生活用具、発掘調査で発見された土器や石器が所蔵されています。

1F



2F



収蔵室



深川市指定無形文化財

しょうじょうじ しごだん
猩々獅子五段くずし

昭和40年9月17日指定
いちやん地区



▲猩々獅子五段くずしの舞



▲おはやし

一已地区に明治28・29年に屯田兵が^{とんでんべい}入植^{にゅうしょくかいたく}開拓を開始しましたが、当時は開墾^{かいこん}の仕事におわれ、楽しみや娯楽というものにはなにも一つありませんでした。当時、屯田兵とその家族が、出身地の讃岐^{さぬき}（香川県観音寺市）^{かんおんじし}地方において舞われていた獅子舞のことを思い出し、ふるさとの讃岐に錦を飾ったおりに、獅子頭など道具一式を購入しました。そして、獅子舞の師匠とともに、永住の地と定めた一已村稻穂地区に持ち帰り、地域の若衆^{わかしゅう}が練習を重ね明治35年9月の大國神社^{おおくにじんじや}の例大祭^{れいたいさい}に奉納したのが始まりです。以来、獅子舞を大國神社の例大祭に、余興^{よきょう}および郷土芸能として毎年奉納しています。

舞では、猩々が獅子の先になり、滑稽^{こっけい}なしぐさで獅子にちょっかいをかけながら陽気に舞います。猩々獅子は、雌雄二頭からなっており、二人立の獅子です。獅子自身が非常に活発に荒野をかけめぐる猛獣のように、激しく舞います。五段くずしとは、獅子の一代をあらわし、幼・少・青・壮・老年にわたる生涯を描写していることをさしています。舞い方についても、始めは静かですがだんだん激しくなり、終わりには舞疲れ踊り狂って終わりになります。舞を奉納・披露することで、毎年^{こっかあんたい}の国家安泰^{ごこくじょうじゆ}・五穀成就・悪魔払い・家内安全を祈願しています。

たどしししまい
多度志獅子舞

昭和47年5月17日指定
多度志地区



▲多度志獅子舞



▲多度志獅子舞とおはやし

多度志地区に入植した赤岩氏親子が、故郷富山県に伝わる獅子舞を多度志神社に奉納し伝承したものです。この舞は、富山県東砺波郡上平村猪谷がひがしとなみぐんかみたいらむらいのたに発祥とされており、平家の落武者おちむしやが農作物を守るため、笛や太鼓などを打ち鳴らして猪を退治した次のような故事によっています。

今を去る八百年のむかし、富山県、石川県の国境に、俱利加羅谷くりからだにの源平げんぺい合戦がっせんで、源氏の大將木曾義仲きそよしなかの率いる五万の兵のために平家の大軍十万が敗走し、その平家の残党がいまの富山県東砺波郡上平である猪の谷に落ちのびて住んだ。この山奥の地は猪が多く、落人が耕作するアワ、ヒエ、ソバを食い荒らしたので、落人たちは思い余って勇壮な猪狩りをした。獅子舞はこのときの笛、太鼓、鐘をとり入れて舞いの型を創始した。

型は二頭の獅子（二人立て）の八尾型で5つの舞で猪退治のありさまを激しく勇ましく表現しています。五穀豊穰ごこくほうじょう・家内安全を祈る獅子舞として現在に至っています。

みこし
神輿をかつぐ子ども達▶



おさむないちょうしょうじょうじしまい
納内町猩々獅子舞

昭和 48 年 7 月 17 日指定
 納内地区



▲納内町猩々獅子舞



▲舞いながら参道を練り歩く様子

納内町猩々獅子舞は、納内地区に、屯田兵として明治 28 年に入植した^{やの}矢野^{あきじろう}氏が始まりといわれています。矢野氏は同 35 年に屯田兵役解除になり、後の日露戦争勝利を祝って、明治 40 年に郷里の香川県木田郡奥鹿村（現^{みきちよう}三木町）に伝わる猩々獅子舞を受け継ぎ、自ら師匠となり獅子組長、地区の青少年に伝承しました。初めは地区の地神宮に、草相撲など^{じじんぐう}と^{くさずもう}供に奉納していましたが、昭和 12 年頃に地神宮を納内神社境内に移したのを機に神社で奉納するようになったともいわれています。

獅子は二頭（二人立て）で、猩々は見当たらないですが、1 の舞から舞い込みまで 15 段階あり、「天狗の舞」「白狐の舞」「猩々の舞」など多彩な舞を見せます。納内町猩々獅子舞保存会が舞を保存継承しています。舞は 12 または 15 種類があるとされ、獅子舞はまず 2 頭で舞います。しかし、2 頭は普通の夫婦獅子のように横並びで舞うのではなく、社殿前でも前後^{めおとじし}一列になり、また 2 頭が絡むことなく、太鼓・鉦^{しょう}の伴奏を聞きながら舞います。



▲前後一列で舞う様子

深川市の和太鼓団体

深川市には、和太鼓の演奏技術を伝承している団体が2つあります。文化財指定はされていないものの、さまざまな行事で活躍かつやくしています。

◆ **たどしだいこ** 多度志太鼓 …… 多度志地区



▲多度志太鼓の演奏

多度志保育園で太鼓を学んだ子どもたちが、小学校入学後も太鼓を続けたいと学校帰りに保育園で練習を重ねている姿を見て、保護者や地域子供会育成関係者が子どもの健全育成と地域振興ちいきしんこうを目的に地域発のオリジナル太鼓として平成6

年に設立しました。設立以来、地域住民の余興よきょう及び地域芸能として受け継がれ、普段は週1回の練習げんりょうで技量を高め、オリジナル曲の「初」「夢」「北夢童」「大地」を地域の祭りやイベント、各種行事のアトラクションなどで演奏しています。また、新たな曲の制作にも取り組んでいます。

◆ **おとえ だいこ** 音江イルム太鼓 …… 音江地区

徐々に人口が減少する中、音江地区で昭和54年に、地域のお祭りを賑やかにしようと地域住民により創設され現在まで受け継がれてきました。太鼓という郷土の文化芸能活動を通して子どもたちの健全な育成と世代間交流の活発化を図るなど大きな意義のあるものとなっています。



▲音江イルム太鼓の演奏

普段は週1回の練習で技量を高め、オリジナル曲の「暴れ打ち」「祝い太鼓」「北なだの灘はやぶさ」「隼」などを音江地区のお祭りだけでなく、市の氷雪まつりなどの各種イベントひょうせつで演奏しています。活動拠点として市指定文化財きゅうわだのうじょうじむしょの旧鷺田農場事務所を活用しています。

深川市指定史跡

おと え ぼ っ け え き て い し ょ あ と
音江法華駅逦所跡

昭和 55 年 7 月 3 日 指定

音江町字音江 42 番地 3

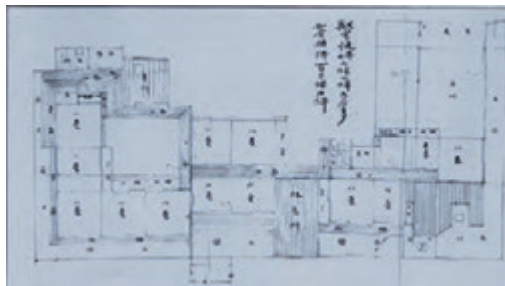


▲音江法華駅逦所跡

▲岩見沢 忠 別太間人馬継立兼 休泊所等設置場所図
いわみざわちゆうべつぶとかんじんばつぎたてけんきゅうはくじよなどせつちばしよず

駅逦所とは、北海道の開拓時代にできた宿場のことです。廃藩置県後、開拓使は石狩川流域を中心に北海道の内陸の開拓を促進するため、直接支配していた上川地方を拠点のひとつと決めました。そこで、上川地方の調査をおこなった結果、開拓をすすめるには道路の開削が必須であることがわかり、札幌から上川に至る主要交通路として「上川道路」の工事がおこなわれることになりました。この完成に伴い設けられたのが音江法華駅逦所です。

高畑利宜が駅逦兼休泊所の設置を北海道庁へ請願し、明治 22 年 6 月に建物が完成しました。そして、上川道路の中継点として人馬を備え、宿泊と運送の便をはかる重要な場として役割を果たしました。駅逦には、本屋や厩舎などの付属施設がありましたが、現在当時の建物は残っていません。場所は、国見峠へ至る市道音 43 号線（旧上川道路）わき、「敬徳寺」の斜め向かいにあり、現在は駅逦があったことを示す標柱が建てられています。



▲音江法華駅逦所平面図

とんでんほへいだいちだいたいほんぶあと
屯田歩兵第一大隊本部跡

昭和 55 年 7 月 3 日指定

いちやん
 一已町字一已 4151 番地 3-5



▲屯田歩兵第一大隊本部

屯田兵歩兵第一大隊は、もともと札幌に本部がありました。この隊は、^{ことにへいそん}琴似兵村の第一中隊、^{やまはなへいそん}山鼻兵村の第二中隊、^{しんことにへいそん}新琴似兵村の第三中隊、^{しのろへいそん}篠路兵村の第四中隊、^{わにしへいそん}室蘭・輪西兵村の第五中隊で編成されていました。

しかし、明治 27 年になる頃、そこに

いた屯田兵は任期を終える者がほとんどでした。そこで、明治 28 年から 29 年にかけて屯田兵を新たに募集し^{うりゅうとんでんへいそん}雨竜屯田兵村の編成をおこない、本部を札幌から深川に移す計画がたてられました。兵の募集をおこなった地域は関西地方が主で、^{じゅうじ}北辺の警備と北海道開拓に従事するために集められました。そして、明治 28 年 5 月、彼らは郵船会社^{きせんとさまる}の汽船土佐丸で小樽に入港し、一已、^{ちっぶべつ}納内および秩父別に入植しました。その後、7 月に大隊本部が札幌から移転して来た場所が、この屯田歩兵第一大隊本部跡です。現在、当時の建物などは残っていませんが、^{ひょうちゅう}標柱が建てられその位置が示されています。場所は「教円寺」の境内です。



▲屯田兵村図(北海道立文書館蔵)

明治 29 年に作られたもの。村の区画や道路等の配置が記録されている。



▲(上)納内兵村
 (下)一已兵村

かんてきごう
監的壕

昭和 55 年 7 月 3 日 指定

一已町字一已 2527 番地 10



▲監的壕

明治 28 年・29 年に入植した雨竜^{うりゅう}
屯田兵^{とんでんへい}の射撃訓練場跡^{しやげきくんれんじょうあと}です。壕
は的の下につくられており、射撃
訓練の際に命中率を確かめるた
めのものでした。当時は土壕だけ
でしたが、昭和 7 年に在郷軍人分
会によって、コンクリート造りの
壕となりました。

屯田兵には、北海道および樺太^{からふと}の警備をする軍務と、北海道の開拓をおこ
なう農務の二大義務がありました。この義務を果たすため、平時には軍事訓
練を受け、戦時には前線におもむき、一方では、給与地を開墾し農業経営に
励まなければなりません。軍事訓練は、はじめは 1 2 月から 4 月の
農閑期^{のうかんき}におこなわれていましたが、それでは十分な効果が上がらなかつたの
で、明治 18 年からは移住後 3 ヶ月、
特科隊^{とっかたい}は 6 ヶ月、毎日軍事訓練を受けま
した。監的壕はその訓練で使われたもの
です。射撃訓練は 3 番通り 7 丁目付近と
大国神社参道西側（神社車庫のあたり）
から丸山の山ろくの標的に向かって行
われていました。壕の付近からは、当時
の残弾が見つかることもあったようで、
そこから当時の厳しい訓練の様子をう
かがうことができます。

監的壕の場所は「丸山寺」の裏手にあ
ります。



▲屯田兵の装備
(郷土資料館の展示から)

せんじゅうみんぞく たてあなじゅうきよあと
先住民族の竪穴住居跡

昭和 55 年 7 月 3 日 指定

納内町納内 4168 番地先石狩川河川敷



▲先住民の竪穴住居跡

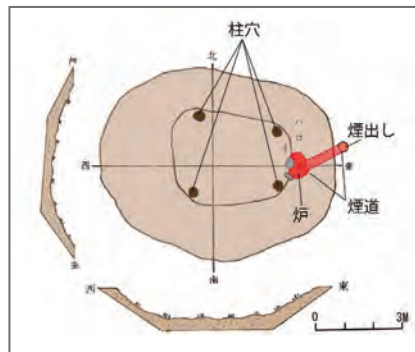


▲竪穴住居跡の位置

神居古潭^{かむいこたん}以西の石狩川^{さつもんじだい}沿いに擦文時代の竪穴住居跡や、炉からでる煙を外に出す役割である煙道^{えんどう}などが発見されました。かつて、石狩川の付近にほぼ円形のくぼみがたくさんあったようですが、それこそが竪穴住居の跡です。昭和 41 年に実施された発掘調査のときには、床面はほぼ正方形で、角はややまるみをおびている竪穴住居が発見されました。

各辺の長さは、東西は 3.1 メートル、南北 2.7 メートルで、床面はほぼ平面のものでした。床面には 4 つの柱穴と、東側に地下にトンネル状に掘られた煙道をもつ炉跡が発見されました。炉跡には、扁平な石が両側にたてられた状態でおかれ、炉の壁は粘土で固められており、地下に煙道を通して傾斜面よりさらに 1.2 メートルの

地点に煙出しの穴があげられていました。炉の近くから、須恵器破片や擦文土器片^{すえきはへん}、石斧片^{せきじん}、石刃、エンドスクレーパーなどの石器類が出土しています。さらに、昭和 51 年には墳墓^{かんばん}と推測できる地帯が住居跡付近の山手に発見され、このあたり一帯が生活の場であったと考えられています。



▲竪穴住居跡の平面図・立面図

ふかがわしすいとうはっしょう ち
深川市水稲発祥の地

昭和 57 年 4 月 1 日指定

音江町字音江 400 番地 12



▲水稲発祥の地



▲試作田跡

明治 25 年、高橋惣吉が旧上川道路近く、音江川沿いの湿地 10 アールほどに種もみをおろしました。これが深川市における最初の水稲栽培でした。

惣吉は岩手県の出身で、明治 19 年に妻子とともに函館へ渡りました。それから 3 年間、様々な仕事で働いたあと、野幌原野に入り農業を始めます。しかし、やせた土地だったためうまくいかず、音江法華に移り住みました。そして、駄馬一頭で運搬業を開始、妻は往来客相手の飲食店を始め、そのかたわら人を雇い、今の広里の開墾をはじめます。農家出身の惣吉は、広里は洪水が起りやすい地域であることに注目し、水稲の試作をくりかえしたのちに成功させました。このときまいた種は有芒赤毛種子であったといわれています。明治 30 年までは、北海道の寒冷な気候の影響で水稲栽培の成功例はほとんどありませんでした。そのため、屯田地での水稲栽培は禁止されており、麦などの栽培がすすめられていました。しかし、惣吉が助言を行うなどして水稲栽培の成功例が増え、その後は本格的な取り組みが行われるようになりました。そして、現在は北海道においても稲作が行われ、地元の米を食べることができるようになったのです。



▲高橋惣吉



まるやまこうえん
▲春：丸山公園のカタクリ



▲夏：花火大会の様子

その他の文化財関連施設

きょうどしりょうかん
郷土資料館

西町3番15号

生きがい文化センター内

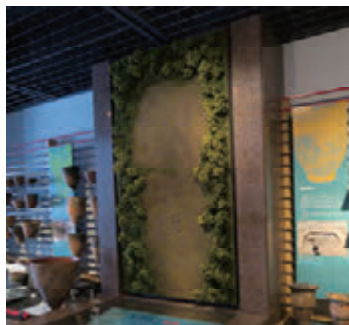


▲郷土資料館入り口



▲民俗資料の展示

郷土資料館は、平成4年に多目的文化施設としてオープンした深川市生きがい文化センターに併設している施設です。資料館は2階建てとなっており、階ごとに時代を分けて展示しています。1階は、深川市域が開拓された明治時代から現代、2階は先史時代から古代の資料で、計約700点の資料を展示しています。特に、2階には国指定の史跡「音江の環状列石」からの出土品や、空から見た環状列石の状況を表したジオラマを常設展示しています。深川市の古代から近代までの歴史の概要を、順を追って学ぶことができることから、生涯学習に欠かせない施設の一つとなっています。また、1階のマルチスライドシアターでは「音江の環状列石」や深川市指定の有形・無形文化財を紹介する映像を見ることができます。



▲環状列石のジオラマと出土品



たいこ かいようせいぶつ
太古の海洋生物

フカガワクジラ

学名：ヒゲクジラ あもく 亜目セミクジラ科
(郷土資料館 2 F に展示)



▲フカガワクジラの こつかくひまうほん 骨格標本

フカガワクジラは、昭和 53 年 9 月、化石を採取するために多度志川流域を探していた市内在住の高橋定右衛門氏らによって発見され、教育委員会に報告されました。発掘は、



▲オレンジ色の部分が産出しています。

北海道開拓記念館の関係者や北海道教育大学札幌分校地学教室の教官と学生、そして地元の多度志中学校の先生が指導する有志の生徒たちが参加して、同年 10 月 1 日から 5 日間で実施されました。産出した化石骨は全骨格の 10% 程度の不完全な一個体分でありましたが、調査の結果、ヒゲクジラ亜目セミクジラ科に属するものであることが分かりました。さらに、昭和 54・55 年に実施された地質調査により、この化石は、地質年代が第三紀鮮新世の前期の地層に含まれていたことから、600 万年以前の多度志地区は海であったことが判明しました。郷土資料館には、産出したフカガワクジラ しんせい の原寸大の化石模型に加え、タカハシホタテや巻貝など、太古の深川に生息していた生物の化石が展示されています。



▲原寸大の化石模型

うたさんぽみち
詩歌の散歩道

西町3番15号

生きがい文化センター裏庭



詩歌の散歩道は、市民に文学に親しみをもってもらうため、平成11年度、生きがい文化センター裏庭に文学碑の散策路として整備されました。

文学碑は、市民や深川にゆかりのある方が作った俳句、川柳、詩などの作品を刻んだ石碑を、創作者の負担によって作成・寄贈していただいたものです。平成23年度末の時点で、59基が設置されています。

現在は、くつろぎの場、ふれあいの場として、市民があつまる場所のひとつとなっています。

深川いしぶみの会

いしぶみの会は、平成13年度に「詩歌の散歩道」の建立者である川西深雪氏の声かけにより、詩歌の散歩道に歌碑を寄贈した方（正会員）及びその遺族（準会員）の有志で結成され、年一回歌碑の清掃と会員の交流を目的として定例会を開催していましたが、平成26年に解散しています。

散歩道に沿って文学碑が並び、四季折々で変化する自然を感じながら詩歌を楽しむことができます。



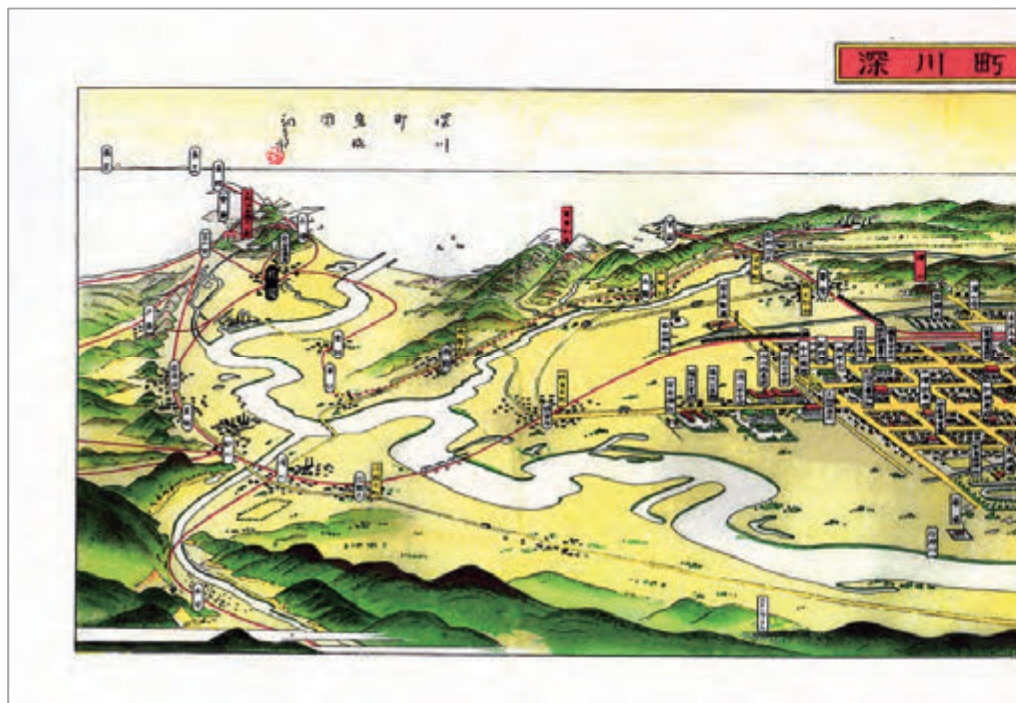


▲秋：稲穂と赤とんぼ



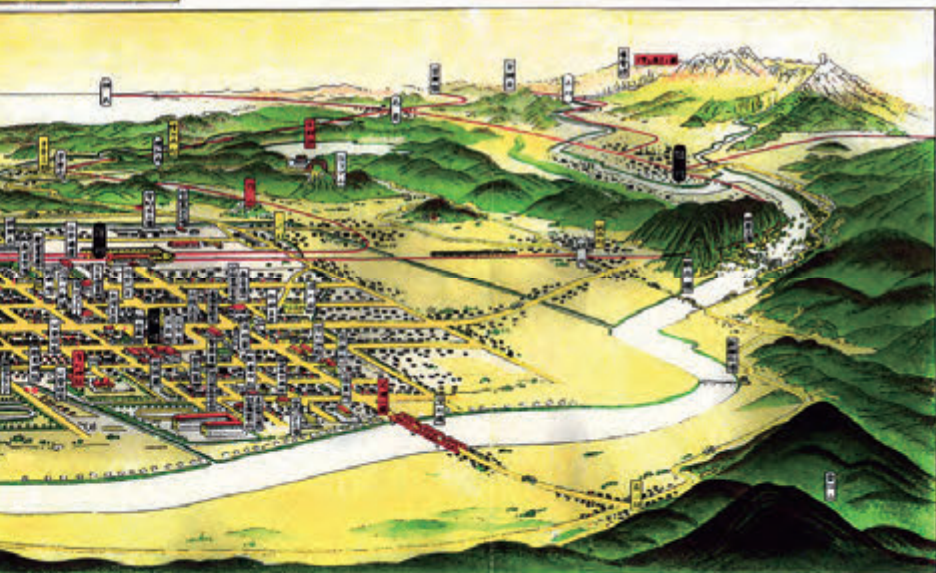
▲冬：小さな駅の雪景色

参考資料



▲吉田初三郎 「深川町鳥瞰図」 1953年

鳥瞰圖



H 177:1



▲吉田初三郎 「一巳村鳥瞰図」 1954年



巴村鳥瞰圖

清康熙二十九年繪 黃州府志 卷之四 輿地



▲吉田初三郎 「多度志村鳥瞰図」 1953年

圖畝鳥



《謝辞》

本書を刊行するにあたり、次の方々や機関等に寄稿や資料提供など便宜を図っていただきました。お忙しい中本当にありがとうございました。

(深川市教育委員会)

【資料提供・協力】

野村 崇氏

滝川市郷土館・北海道大学附属図書館・北海道立図書館・北海道立文書館

音江イルム太鼓保存会・納内狸々獅子舞保存会・狸々獅子五段くずし保存会・
多度志獅子舞保存会・多度志太鼓

【引用文献など】

- p. 4-5 図 2-3 高畑宜一 「石狩川沿岸穴居人種遺跡」『東京人類学会雑誌』
第 10 巻第 103 号 1894
- p. 7 図 4 河野常吉 『北海道史』附録地図 1918
- p. 9-12 図 6-9 駒井和愛 『音江 北海道環状列石の研究』 慶友社 1959
- p. 13 図 10 斉藤忠 『〈写真集〉遺跡—今と昔—』 学生社 1997
- p. 13 図 11 北海道大学図書館 『明治大正期の北海道—写真と目録—〈写真編〉』 北海道大学図書刊行会 1992
- p. 17 深川市教育委員会 『旧鷺田農場事務所調査報告書』
深川市教育委員会生涯学習課 2001
- p. 23 高畑利宜 「岩見沢忠別太間人馬継立兼休泊所等設置場所図」
滝川市郷土館所蔵
- p. 23 深川市総務部開基 100 年記念事務局 「音江駅通駅舎平面図」
- p. 24 「屯田兵村図」1896 北海道立文書館所蔵
- p. 24 「納内兵村」北海道大学附属図書館所蔵
- p. 24 「一巳兵村」北海道大学附属図書館所蔵
- p. 26-27 深川市役所 『深川市史』 1977
- p. 33-34 吉田初三郎 「深川町鳥瞰図」1953 北海道立図書館所蔵
- p. 35-36 吉田初三郎 「一巳村鳥瞰図」1954 北海道立図書館所蔵
- p. 37-38 吉田初三郎 「多度志村鳥瞰図」1953 北海道立図書館所蔵

【参考文献】

- 阿部正巳 「石狩国の環状石籬」 『人類学雑誌』第 33 卷第 1 号 1918
稲場 功 『まるやまー創立 50 周年記念誌ー』 丸山観光協会 2012
河野常吉 「音江村の環状石籬」 『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』
1924
駒井和愛 『音江ー北海道環状列石の研究ー』 慶友社 1959
斉藤忠 『〈写真集〉遺跡ー今と昔ー』 学生社 1997
深川市教育委員会 『旧鷺田農場事務所調査報告書』 深川市教育委員会生
涯学習課 2001
深川市総務部開基 100 年記念事務局 『開基 100 年記念誌ー深川百年のあゆ
みー』 1992
深川市役所 『新深川市史』 1994
深川市役所 『深川市史』 1977
北海道大学図書館 『明治大正期の北海道ー写真と目録ー 〈写真編〉』
北海道大学図書刊行会 1992

深 川 市
ふるさと歴史めぐり

編 集
深川市教育委員会

監 修
深川市教育委員会
野 村 崇

発 行
深川市教育委員会
北海道深川市 2 条 1 7 番 1 7 号

印 刷
松本印刷株式会社
北海道深川市 6 条 8 番 1 0 号
TEL 0 1 6 4 - 2 2 - 5 1 0 1

平成 2 9 年 2 月発行

※この事業は公益財団法人北海道市町村振興協会(サマージャンボ宝くじの収益金)の助成を受けて実施しています。

